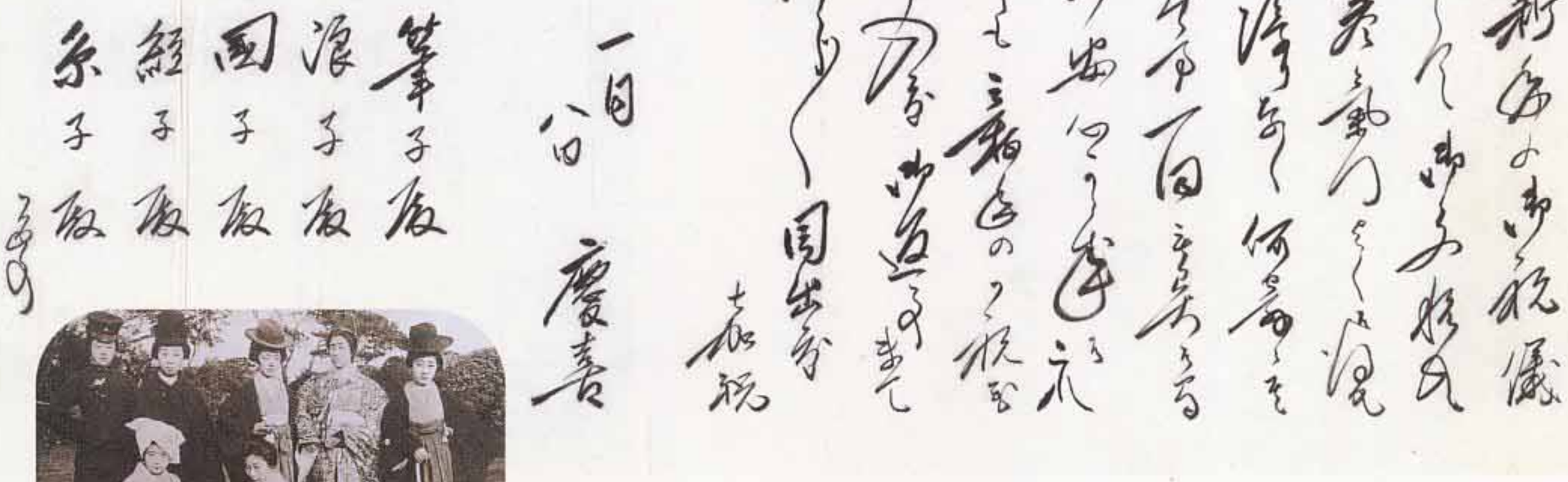
狩猟服姿の慶喜（茨城県立歴史館蔵）

第16回企画展

徳川慶喜（よしのぶ）と蜂須賀（はちすか）家

慶喜・娘への手紙

神戸～鳴門ルート全通記念事業
出会い・ふれあい・感じる未来
とくしま夢発進'98



慶喜の娘たち（徳川博物館蔵）

1998年4月28日［火］▷8月2日［日］　午前9:30▷午後5:00

休館日　毎週月曜日・毎月第3木曜日

展示図録目録用

文化の森総合公園 徳島県立文書館　〒770-8070 徳島市八万町向寺山 TEL(0886)68-3700

◆主催／徳島県立文書館／◆後援／神戸～鳴門ルート全通記念事業実行委員会

その後の慶喜

―徳川慶喜と蜂須賀家のかかわりを中心に―

モダンな趣味人慶喜

一八六七（慶応三）年、大政奉還により将軍職を辞し、起死回生をはかった徳川慶喜は、倒幕派の巻き返しにより、鳥羽伏見の戦いに破れました。江戸に帰った慶喜は、江戸城の無血開城後も、ひたすら恭順・謹慎し、水戸から静岡に移った後も、約三十年間の蟄居生活を続けました。

一八九七（明治三十）年、六十一才の時、東京に移り、翌三十一年はじめて明治天皇に謁見し、積年の束縛から解き放され、朝敵とされた慶喜は一転、明治維新最大の功労者として処遇されるようになったのです。

一九〇二（明治三十五）年には勅旨により徳川本家から分家し、明治の元勲として公爵を授けられ、一九一三（大正二）年、七十七才で没しました。

歴史の表舞台から引退した慶喜は、政治とは完全に没交渉で、ひたすら趣味に打ち込む日々でした。生来、多才多芸で何事にも才能を発揮した慶喜は、弓や狩猟で身体を動かし運動にはげむ一方、書や油絵・写真、はては刺繍にいたるまで趣味をひろげて没頭しました。「西洋かぶれ」と評された彼の残した遺品や遺作からは、好奇心旺盛で、才気活発、モダンな近代人慶喜の姿が浮かび上がります。

徳川慶喜と蜂須賀家

阿波の藩主であった蜂須賀家は、江戸時代には外様大名として位置づけられていました。しかし、徳川幕府の婚姻政策もあって、江戸時代後期には、十一代将軍家斉の子斉裕（なりひろ）が、十三代阿波藩主に迎えられました。その後、最後の藩主であった茂韶に水戸徳川家から随子（よりこ）が嫁入りするなど、徳川家と蜂須賀家は親密な姻戚関係を結ぶようになりました。

徳川慶喜は引退後、二十一人の子供をもうけました。娘たちは一橋家（三女鉄子）や水戸徳川家（十一女英子）や、伏見宮家（九女経子）などの皇・華族に嫁しました。そのうち、四女筆子は蜂須賀茂韶（もちあき）の嫡子正韶（まさあき）に嫁ぎました。

蜂須賀茂韶は、大名華族の代表的な存在として、明治の政界・財界で活躍しました。筆子が嫁した時、慶喜は五十九才で、まだ静岡に住んでいました。当時、貴族院議長であった茂韶は五十才で、翌々年には、第二次松方内閣の文部大臣となる全盛期でした。慶喜は、翌年東京に移住し、巣鴨に住んだため、両家の関係は一層親密となりました。

明治期の蜂須賀家邸は、三田と高輪にあり、正韶と筆子は、広大な三田屋敷の中に新居を構え、舅・姑の茂韶・随子夫婦と同居していました。

慶喜は、趣味の囲碁や謡を通しても、茂韶との交際を深めました。写真を趣味としていた慶喜が撮影したと思われる、新婚時代の正韶・筆子夫妻と筆子の姉妹たちとの記念写真が残されており、家族ぐるみの交流がうかがわれます。小石川の小日向邸に移り住むにあたっては、正韶の世話にもなったようです。慶喜の手紙に登場する孫の年子も、しばしば慶喜邸を訪ねています。

徳川慶喜略年譜

蜂須賀家との関わりを中心に―

西暦	和暦	年齢	月	事項
1837	天保 8	1才	9	慶喜、江戸小石川水戸藩邸に生まれる
1847	弘化 4	11才	9	一橋家の養子となり、家督を相続する
1855	安政 2	19才	12	美賀子と結婚する
1862	文久 2	26才	7	将軍後見職となる
1863	文久 3	27才	12	朝廷より参与を拝命する
1864	元治元	28才	7	禁門の変で、御所防衛軍を指揮して活躍する
1866	慶応 2	30才	8	徳川宗家を相続する
			12	征夷大将軍に任じられる
1867	慶応 3	31才	10	大政奉還。将軍職を辞す
			12	辞官納地
1868	明治 1	32才	1	鳥羽伏見の戦いで敗れ、海路江戸城へ帰り恭順する
			4	江戸をたち水戸弘道館に謹慎する
			7	弘道館をたち駿府（静岡）に謹慎する
1873	6	37才	6	鏡子、誕生
1874	7	38才	2	厚、　誕生
1875	8	39才	10	鉄子、誕生
1876	9	40才	7	筆子、誕生
1877	10	41才	8	博、　誕生
1880	13	44才	5	慶喜、正二位に叙せられる
			9	浪子、誕生
1881	14	45才	5	蜂須賀茂韶、水戸徳川慶篤娘随子と結婚（再婚）
			8	蜂須賀茂韶、芝区三田綱町邸を購入
1882	15	46才	1	国子、誕生
			9	経子、誕生
			11	厚、　華族となる
1883	16	47才	3	蜂須賀茂韶特命全権公使としてフランスに出発
			9	糸子、誕生
1886	19	50才	9	蜂須賀茂韶、帰朝する
1887	20	51才	3	英子、誕生
			3	鏡子、田安（徳川）達考に嫁ぐ
			6	蜂須賀正韶、イギリスに留学する
			10	誠、　誕生
1888	21	52才	6	慶喜、従一位に叙せられる
			8	精、　誕生
1890	23	54才	2	博、池田輝知の養子となる
			5	蜂須賀茂韶、東京府知事となる
			12	鉄子一橋（徳川）達道に嫁ぐ
1891	24	55才	7	蜂須賀茂韶、貴族院議長となる
1893	26	57才	1	慶喜母文明夫人吉子亡くなる
			9	鏡子、亡くなる
1894	27	58才	7	慶喜の正室美賀子夫人亡くなる
1895	28	59才	12	浪子、松平斉（津山藩分家）に嫁ぐ
			12	蜂須賀茂韶、正二位に叙せられる
			12	蜂須賀正韶、イギリス留学より帰国する
			12	四女筆子、蜂須賀正韶に嫁ぐ
1896	29	60才	9	蜂須賀茂韶、第二次松方内閣文部大臣となる
			12	蜂須賀年子、誕生
1897	30	61才	1	経子、伏見宮博恭王に嫁ぐ
			11	蜂須賀茂韶、枢密顧問官となる
			11	慶喜、静岡から東京へ移住する（巣鴨邸）
1898	31	62才	3	慶喜、家達と共にはじめて参内し天皇・皇后に会う
			12	蜂須賀笛子、誕生
1901	34	65才	4	蜂須賀小枝子、誕生
			12	慶喜、小石川小日向邸に移る
1902	35	66才	6	徳川宗家より分家し、公爵を授けられる
1903	36	67才	2	蜂須賀正氏、誕生
1905	38	69才	2	慶喜側室信、亡くなる
1906	39	70才	5	糸子、四条隆愛に嫁ぐ
1907	40	71才	12	筆子、亡くなる
1908	41	72才	4	勲一等、旭日大綬賞をうける
			11	慶久、威仁親王二女実枝子女王と結婚
1910	43	74才	12	慶喜、隠居する。慶久が家督を継ぐ
1913	大正 2	77才	11	誠、分家し華族・男爵となる
			11	慶喜没（22日）
1915	4		12	慶喜側室幸、亡くなる

ごあいさつ

第十六回企画展は「徳川慶喜と蜂須賀家」といたしました。これは平成十年に徳島県民の百年の夢であった本四連絡架橋が全線開通し、政治も経済も文化も近畿圏に直結し、徳島の県民性も大きく様変わりをしようとしています。この記念すべき大事業への協賛の企画展であります。

阿波藩と徳川幕府とのつながりは深く、初代藩主・至鎮夫人は徳川家康の養女・萬（虎）であり、至鎮が三十五才の若さで死亡したことから毒殺説までさやかれ、徳島城表御殿庭園の踏み割り石の伝説と合わせて、今も語りつがれています。しかし、至鎮自身は一六一四、五年の大坂の役での大活躍により、淡路領を加増され、また、松平の称号も与えられています。さらに、十三代藩主・斉裕は徳川幕府十一代将軍・家斉の子であり、次の十四代藩主・茂韶夫人は水戸藩主の娘・随子であります。この随子との関係もあり蜂須賀正韶（十五代）に徳川幕府十五代将軍・徳川慶喜の四女・筆子が明治二十八年十二月二十六日に嫁入りをしています。慶喜は幕末の激動期に将軍となり、癸丑（一八五三年）以来の欧米列強の圧力や国内では開国か攘夷かで、激しく対立した政治的危機に最後の将軍となっています。今、NHKの大河ドラマ「徳川慶喜」で描かれている慶喜は、文武両道にわたって多才多芸を発揮している凛々しい将軍として登場しています。

今回の徳川慶喜の手紙展から見るかぎり、政治や歴史に翻弄され、艱難辛苦に悩み抜いた将軍の姿ではなく、娘（筆子）や孫（年子）達に心やさしい父親の一面を示すものばかりであります。ドラマと合わせて手紙等を見ていただくと人間・慶喜像がより深く理解できると思います。

展示にあたり資料の提供をいただきました茨城県立歴史館、㈶水府明徳会徳川博物館、松戸市戸定歴史館と各館員の方々、蜂須賀家文書を寄託いただいております静岡市・安南寺住職清陀七生氏、さらには手紙等の解読に御協力いただきました、徳島の古文書を読む会の有志の方々に心より御礼申し上げます。

平成十年四月二十八日

徳島県立文書館長　小林勝美

徳川慶喜と蜂須賀家の関係図

○付数字は将軍の代数

水戸徳川家

徳川斉昭
- 昭武（水戸本家へ）
- 慶喜（徳川宗家へ）
- 慶篤 ═ 昭武 ═ 篤敬 ── 圀順
  - 篤敬（水戸本家へ）
  - 篤守（清水家へ）
  - 随子（蜂須賀茂韶夫人）

養子 ── 婚姻

蜂須賀家

斉昌 ═ 斉裕（家斉二十二子）
- 茂韶 ── 正韶
  - 筆子（四女　侯爵・蜂須賀正韶夫人）
    - 年子
    - 笛子
    - 小枝子
    - 正氏
  - 鏡子（長女　伯爵・田安徳川達孝夫人）
  - 厚（四男　分家　男爵）
  - 鉄子（三女　伯爵・一橋徳川達道夫人）
  - 博（五男　侯爵・鳥取池田家養子のち仲博）
  - 浪子（七女　男爵・津山分家松平斉夫人）
  - 国子（八女　子爵・大河内輝耕夫人）
  - 経子（九女　伏見宮博恭王妃）
  - 糸子（十女　侯爵・四条隆愛夫人）
  - 久（七男　公爵のち慶久・後嗣）
  - 英子（十一女　公爵・徳川圀順夫人）
  - 誠（九男　分家　男爵）
  - 精（十男　勝海舟養子　伯爵）

徳川宗家（将軍家）

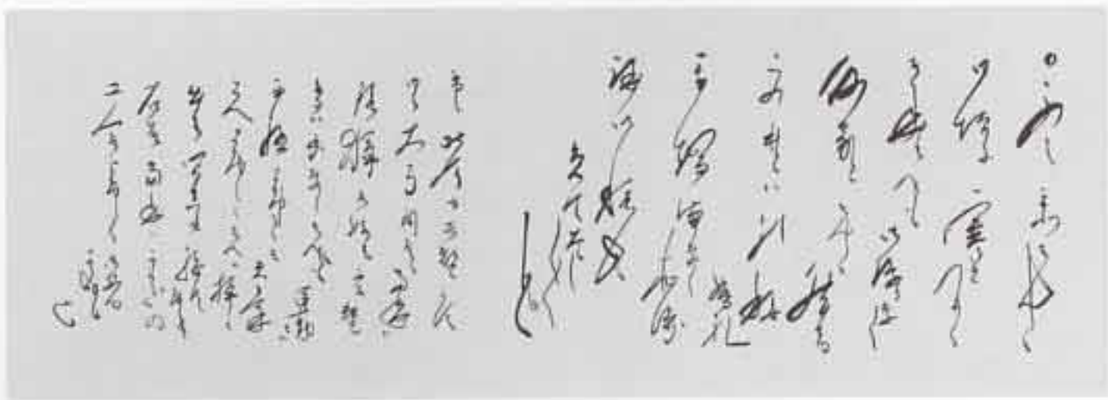
⑪ 徳川家斉
- 斉裕（蜂須賀家へ）
- ⑫ 家慶 ── ⑬ 家定 ═ ⑭ 家茂 ═ ⑮ 慶喜 ═ 家達 ── 家正

徳川慶喜

【明治二十八年　慶喜より筆子あて】

御ふミ忝そんし候
日増に寒さつよく
相成候へとも御障りなく
何寄とそんし候然者
このほとハ引移
婚礼
万端滞なく相済
誠以悦入候
めてたく
ママママ
ママママ
か
しく

お手紙ありがとうございました。
日増しに寒さが厳しく
なりますが、お障り無く
何よりと思います。
さて、このほどはあなたの引っ越し
婚礼
万端滞り無く済み、
誠に喜んでおります。
めでたく
めでたく
めでたく
か
しこ



尚々昨今も相替らす
日々大弓致居候当年ハ
銃猟相始候不相替
鳥ハ少なく候へとも運動ニハ
至極よろしく候天気
さへよろしく候へハ猟ニ
出候写真も続て致居候
右故当年ハからだの
工合よろしく御安心
可被成候
以上

なお、私は昨今も相変わらず
毎日大弓を引いております。今年は
もう猟銃も始めました、相変わらず
鳥は少ないのですが、運動には
大変良いようです。天気さえ
よければ、猟に出ています。
写真も続けております。
ですから、体の具合は
良いのでご安心
ください
以上

明治二十八年十二月蜂須賀正韶帰国後、同月二十六日あわただしく挙式をあげた筆子に出されたお祝いの手紙です。筆子が結婚に際して父へ出した手紙の返事と思われます。「めでたく」を繰り返すところに慶喜の思いが込められているように思えます。

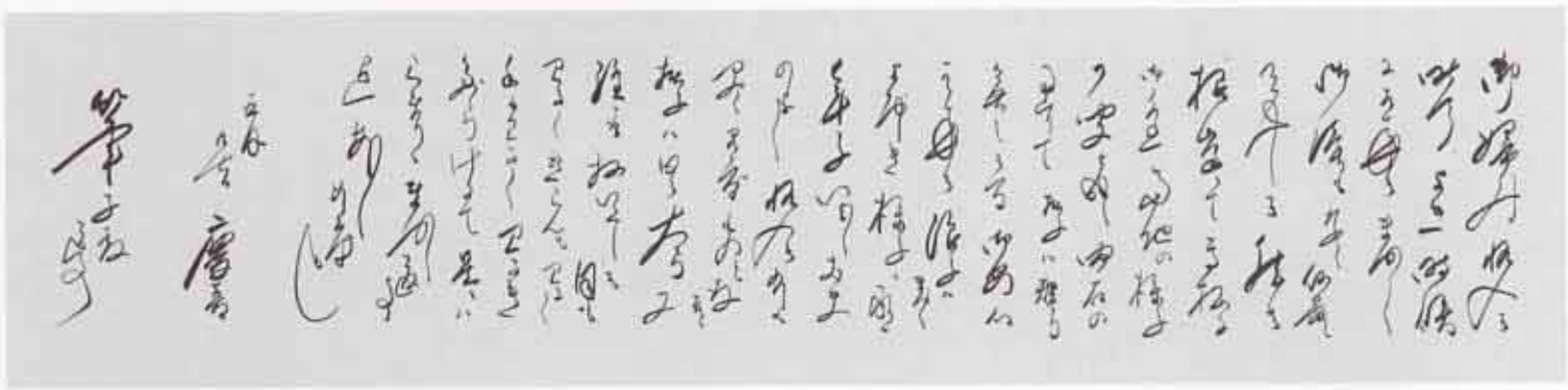
尚々書き以降は、慶喜自身の近況を伝えるものですが、日課としていた弓、冬が猟期である鳥打ち猟、写真という三つの趣味が出てきます。健康のために運動を続ける慶喜の姿が見られます。（ハチス二九一）

弓をひく慶喜
（茨城県立歴史館蔵）

【明治三十年　慶喜より筆子あて】

御ふみ悦入候
昨今よき時候
に相成候まつ々々
御障りもなく何寄と
そんし候然者
根岸ニて高松に
御逢当地の様子
御聞被成候由右の
通りて拙子ハ替り
無之候間御安心
可被成候浪子ハまつ々々
よろしき様子ニ承り候
年子いよ々々丈夫
のよし悦入候少しも
早く見度ものと存居候
拙子ハ日々大弓又
縫取抔いたし候目も
わるくきこんもわるく
手もわるくわるき
だらけにて是ニハ
こまり候まつ々々御返事
迄あら々々めて度
か
しく
五月
廿七日　慶喜
筆子殿
御返事

お手紙をいただいてよろこんでおります。昨今はよい季節に
なりますます
お障りもなく何よりに
思います。さて
根岸にて高松（凌雲）に
逢い、こちらの様子を
聞かれたとのこと、このとおり
私は変わりありません
ので、ご安心してください。
浪子（慶喜七女）はますます
よろしい様子と聞いております。
年子（筆子長女）はいよいよ丈夫との
こと喜んでおります。少しでも
早く見たいものと思っております。
私は毎日大弓を引き、また
縫い取り（刺繍）などをしています。
最近は目も悪く、根気もなく
手も悪く悪いところだらけ
にてこれには困っております。
まずまずご返事まで
あらあら　めでたく
かしこ
五月二十七日　慶喜
筆子殿
ご返事



この手紙の年代は明治三十年と思われます。筆子の娘年子が生まれたのは明治二十九年十二月ですが、この文面からは、慶喜は年子と会っていないことが読みとれます。明治三十一年五月に慶喜は蜂須賀邸に行っています。

このころ慶喜はまだ静岡におりました。筆子が東京の根岸で高松凌雲（医師）と逢い、静岡の状況を聞いて手紙を出したものの返事と思われます。このころ妹の浪子は結婚後五ヶ月で夫松平斉（津山松平分家）が失踪し、そのことがこの書簡にも書かれています。

慶喜自身は、毎日大弓を引き、刺繍などをしていることを記していますが、最近は目も手も悪く根気もなく悪いところだらけだとユーモラスにこの手紙を締めくくっています。（ハチス三一一）

蜂須賀文書と慶喜の手紙

「徳川慶喜家・家扶日記」（戸定歴史館蔵）

現在残されている蜂須賀家文書のうち、その藩政に関する大半の文書は、国立史料館に収蔵されています。但し、明治以降に蜂須賀家が東京に移住した後の蜂須賀家個人の文書群一、〇五一点は、昭和五十四年徳島県立図書館に寄託され、徳島県立文書館に収蔵されています。

その内容は、蜂須賀家の家に関する明治以降の記録が中心ですが、知行状・御感状などの藩政期の記録、書籍・書画・手紙なども含まれています。

筆まめであった慶喜は、多くの娘たちに数多くの手紙を書きましたが、蜂須賀家に残されている約五十点は、明治三十年前後に筆子や正韶にあてて出されたものです。

書をよくした慶喜の、流麗で力強い筆致の手紙は、娘に対するご機嫌伺いのあいさつや、孫の成長を気遣い、喜ぶ、ごく普通の父親や祖父の気持ちにあふれたものです。激動期を生き抜いた辣腕の鋭さや政治的な生臭さをまったく感じさせない、引退後の慶喜のごく普通の日常生活がしのばれます。

慶喜のこれらの手紙のことは、慶喜家の家政記録である「家扶日記」（松戸市戸定歴史館所蔵）に記載されており裏付けることができます。

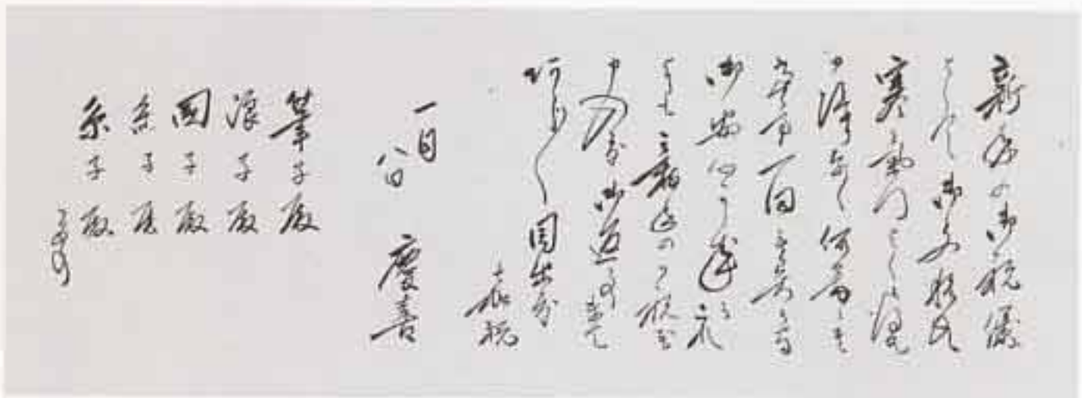
「家康の再来」とまでいわれた慶喜については、従来激動期を生き抜いた才気煥発で劇的な側面しか知られていませんでしたが、これらの手紙を通して、引退後の慶喜のごく平凡なひとりの人物の日常生活が浮かび上がってきます。慶喜の人物研究のうえでも貴重なものとして注目されます。

慶喜の娘たち（徳川博物館蔵）

【明治二十八年ごろ慶喜から筆子ほかあて】

新年の御祝儀
として御文悦入候
寒気つよく候得共
御障りなく何寄ニ候
当方一同無異候間
御安心可被成候
これ
よりも新年の御祝義
申入度御返事まて
あらゝゝ目出度
嘉祝
一月
八日　慶喜
筆子殿
浪子殿
国子殿
経子殿
糸子殿
御返事

新年のいわい
としてのお手紙よろこんでおります。
寒さが厳しいのですが、
お障りないとのこと、何よりです。
われわれの方も変わりありません。
ご安心下さい。
私からも
新年のいわいを
お伝えしたく、御返事まで
あらあら　めでたく
かしこ
一月
八日　慶喜
筆子殿
浪子殿
国子殿
経子殿
糸子殿
ご返事



筆子（四女）を筆頭に、浪子（七女）・国子（八女）・経子（九女）・糸子（十女）の五人の姉妹に出された年賀状の返礼の手紙です。この五人の姉妹が仲良く父に出した年賀状を読む慶喜のうれしそうな顔が浮かんでくるような文面です。明治二十三年以降、慶喜の娘たちは華族女学校（のちの女子学習院）通学のため、東京千駄ヶ谷の義兄であり、徳川宗家を嗣いだ家達の家に預けられていました。静岡に住む慶喜からわかれて暮らしていた娘達への手紙でしょう。明治二十八年十二月七日に浪子が結婚する以前に出されたものと思われます。

【明治三十一年　慶喜から筆子あて】

昨夜ハ御ふみ悦入候
まつ〻〻御障りもなく
何寄と
そんし候一昨日者
緩々御目ニ
かゝり写真も数枚うつし
大慶至極ニ候出来の
処ハ如何哉何れ出来の
上ハ御目ニかけ可申候
暑さの
折表奥の人々ニも色々
世話ニ成候御序ニよろしく
御伝声可被下候万事
御親しき御取扱ニて別て
大慶ニ御座候是ヨリハ又
度々出候事と楽しミ居候
御返事まであら〻〻
めて度
可祝
八月
九日　慶喜
筆子殿
御返事
猶々正韶様へも宜敷
御伝声可被下候
以上

昨夜手紙をいただき喜んでおります。
まずまずお障りもなく
何よりと
思います。一昨日は
ゆっくりお目に
かかり写真も数枚うつし
大変喜んでいます。写真のできは
どうだろうか。いずれできましたら
お目にかけます。
暑さの折
表奥の人々にもいろいろ
世話になりました。ついでの時によろ
しくお伝え下さい。すべて
親しく接していただき、大変
喜んでおります。今後もたびたび
お伺いしようと楽しみにしています。
御返事まで　あらあら
めでたく
かしこ
八月
九日　慶喜
筆子殿
御返事
なお、正韶様へもよろしく
お伝えください。
以上

明治三十一年五月二十六日以降慶喜は何度となく蜂須賀邸を訪ねています。この書簡の年代は、「家扶日記」の記述から明治三十一年八月九日のもので、八月七日に訪問した際の礼状です。人々にお世話になったことに対してお礼をいい今後も蜂須賀邸に行くことを楽しみにしているという文面に、親族としてのつき合いの深さが見えます。また、写真機を持ち込んで数枚の写真を慶喜自らが写し喜んでいます。慶喜が撮影した蜂須賀邸はどのようなものだったのでしょうか。

（ハチス二九三）

洋装した慶喜（茨城県立歴史館蔵）

【明治三十一年　慶喜から正韶あて】

拝啓残暑厳敷候
処愈御清安奉賀候
然者先頃之写真漸く
出来致候ニ付二通り御目ニ
掛ケ申候一通りハ少々濃く
一通りハ少々薄めニ出来致候
随様ニハ当節鵠沼ニ
御滞在之由ニ付一通り鵠沼へ
御廻し奉願候暗室新
規ニこしらへ候処是迄と
光線之工合違ひ別て
不出来ニ御座候不出来之分ハ
取除きかなり出来候分丈ケ
相廻し申候何も用事のミ
早々不備
九月
五日　慶喜
正韶様
玉机下

拝啓残暑厳しきところ
いよいよご清安お喜び申し上げます。
さて、先頃の写真やっとできました
ので、二通りお目にかけます。
一通り目は、少々濃く
もう一通りは少々薄めにできました。
随（随子）様は、最近鵠沼（神奈川県）
にご滞在とのこと、一通り鵠沼へ
廻してください。暗室を新しく
造りましたところ、これまでと
光線の具合が違い、とても
不出来でした。不出来の分は
取り除き、かなり出来のよい分だけ
まわしました。いずれも用事のみ
早々　不備
九月五日　慶喜
正韶様
玉机下

慶喜の娘たち　右端が筆子（徳川博物館蔵）

慶喜の写真好きは有名であるが、この書簡をみると自宅に暗室まで造ったことがわかります。新しく造った暗室なのでこれまで現像をしていたところとは光線の具合などが変わり苦労していることを記していますが、写真を濃いめや薄めに焼き付け分けたり存分に楽しんでいることが伺われます。

「家扶日記」にある随子が鵠沼に滞在していることの記述などから、明治三十一年のものであると推定されます。

（ハチス三三〇）

【明治三十一年　慶喜から筆子あて】

御ふミ悦入候昨今ハ
よほとひえ々々敷相成候
まつ々々御障りなく
何寄と
そんし候其後は誠
御不音ニ打過候日々
運動被成候よし何寄と
そんし候運動が
かんじむと
年子もさぞ々々成長と
そんし候何れ近日之内ニ
参上様子も見度と
存居候
此程は松戸辺へ度々
銃猟ニ参り先相応ニ
獲ものも有之候随而
運動
もよろしく申分も無之候間
御安心可被成候今日ハ
皇后陛下一條家へ
行啓被在候ニ付拙子も
御同家ヨリ御招きニて出候
事ニ候先は御返事
迄あら々々申入候
めて度
可祝
十一月
二日　慶喜
筆子殿
まいる

お手紙をいただき喜んでおります。昨今はよほど冷え冷えとして参りました。まずまずお障りもなく
何よりと
思います。その後はまことに
ご無沙汰いたしております。日々
運動をされているようで何よりと思います。運動が
肝心と
年子もさぞさぞ成長していることと思います。いずれ近日中に
参上し様子も見たい
と思っています。
最近は松戸（千葉県松戸市）あたりにたびたび猟に行き、まずまず相応に獲物もあり、だから
運動にも
よろしく（健康も）申し分ないので
ご安心下さい。今日は
皇后陛下が一條家へ
行幸されたときに私も
一條家よりお招きを受けて伺い
ました。まずはご返事まで
あらあら申しました。
めでたく　嘉祝
十一月二日　慶喜
筆子殿
まいる

この手紙にある一條家での皇后陛下との対面は、「明治天皇記」の明治三十一年十一月二日の項に出てきており、能楽を鑑賞し食事をしたことが記されています。「家扶日記」によるとこの筆子への手紙は一條家へ行く前に出されたものであることがわかります。

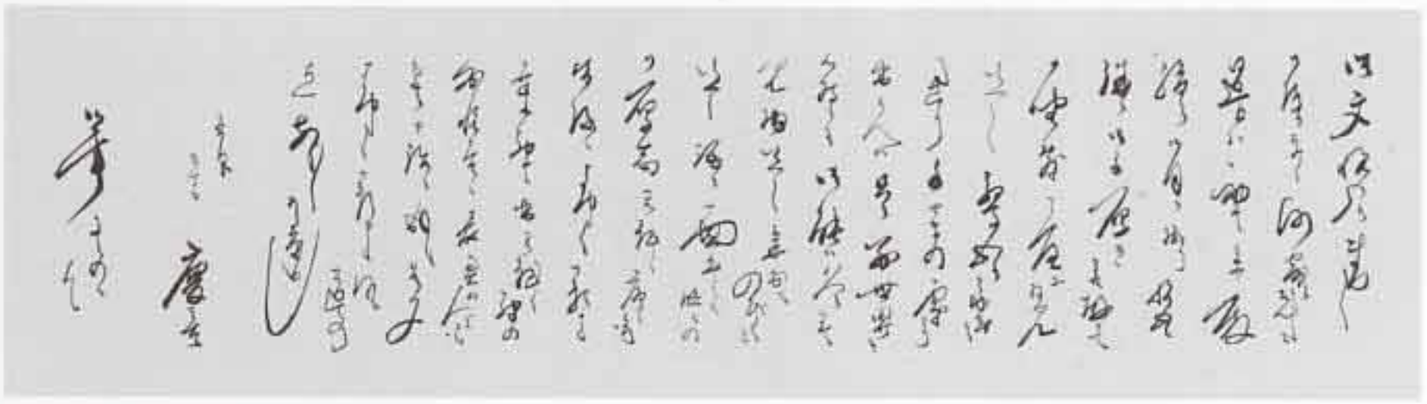
このとき筆子の娘年子は二才になるところ（二十九年十二月生まれ）で、また筆子は次女笛子（三十一年十二月生まれ）を身ごもっており、娘や孫への思いに満ちあふれた手紙になっています。特に妊婦である筆子に運動が肝心であると、しきりに運動をすすめている所などは、近代的な慶喜らしい一面といえるでしょう。

（ハチス二九五）

【明治三十一年　慶喜から筆子あて】

御文悦入候まつ々々
御障りなく何寄とそんし候
過日ハ初て参殿
緩々御目ニ掛り悦入候
誠ニ御手厚き御取扱ニて
御座敷御庭等拝見
いたし驚入候御承知之
通り手せまの処より
出候へハ只々別世界之
心持ニ候御能ハ久々にて
見物いたし気分も
のびの々と
いたし誠ニ面白く候段々の
御厚志有難く序之節
皆様へよろしく御頼申候
幸も初て出有難く殊の
外悦居候表奥の人々ニも
色々世話ニ成候是又
よろしく御頼申候何も
御返事
迄あら々々めて度か
しく
五月
三十日　慶喜
筆子どのへ
まいる

お手紙喜んでおります。まずまず
御障りなく何よりに思います。
先日は、初めて蜂須賀邸へ伺い
ゆっくりとお逢いでき喜んでおります。
誠に手厚く歓待していただき
お座敷やお庭などを拝見し
驚いております。ご承知の通り
手狭のところ（巣鴨慶喜邸）より
お伺いしたので、ただただ別世界の
様な気持ちでした。能は久々に
見物いたし気分も
のびのびと
いたし誠に面白く過ごせました。様々
なご厚志ありがたく、ついでのときに
皆様へよろしくお伝え下さい。
幸（慶喜側室、筆子の実母）も初めて
伺いことのほか喜んでいます。表・奥
人々にも世話になりました。これも
よろしくお伝え下さい。
御返事まで
あらあら、めでたく　かしこ
五月
三十日　慶喜
筆子どのへ
まいる



徳川慶喜が三田綱町の蜂須賀邸を初めて訪ねたのは明治三十一年五月二十六日でした。「家扶日記」（松戸市立戸定歴史館蔵）には三日前の二十三日蜂須賀家へ出かけるために午前中に馬車を回すことや、土産を用意することが書かれています。二十六日当日は、十一時四十五分出門したこと、お供に梅澤氏を連れていったこと、午後十一時に帰邸したことなどが書かれています。さらに翌二十七日家扶の新村（猛雄）を遣したこと、翌々日の五月二十八日には、茂韶・随子・正韶の三人宛に手紙を出したこと、三十日には筆子に手紙を出したこと等が見えています。「家扶日記」からも蜂須賀邸訪問は大きな事件だったことが伺えます。

この書簡には、蜂須賀邸の広さ・豪華さに対する慶喜の気持ちや能見物に感心したことが素直に書かれています。この訪問をきっかけに、茂韶とは囲碁や謡仲間として頻繁に訪問し合うことになります。

また、「家扶日記」には出てきませんが側室で筆子の実の母である幸も同道していたことがわかります。娘の嫁ぎ先を訪れた実の母の気持ちはいかばかりであったでしょうか。

（ハチス二九二）

【明治三十四年　慶喜から筆子あて】

梅雨とハ申ながら昨今
不時候ニ候まつ〻〻無障
何寄ニ候然者出立前
被申越候地所之義先日
正韶様御出候節御内
話申置候通弥小日向
第六天町本多実方屋敷
譲受候事ニ談判纏り
多分来月中ニハ受取候
様可相成候右之趣
序之節
正韶様へ被申上猶又
正二位様ニも是迄段々
御配慮被成下候難有奉存候
前文之通治定相成候間
右之段宜敷可申上候様
御頼申候用事のミ
早々嘉祝
六月
廿八日　慶喜
筆子とのへ

梅雨とはいいながら昨今は天候不順ですね。まずまず障りなく何よりと思います。さて出立する前申し越された地所の件、先日正韶様がおいでられたとき内々にお話して置いた通りいよいよ小日向第六天町（現文京区春日）本多実方屋敷を譲り受けることに話がまとまりたぶん来月中には受け取ることができるように成るようです。このことを正韶様へ申し上げて下さい。また正二位様（茂韶）様にもこれまで随分ご配慮をいただきありがたく思っています。この通り決まりましたのでこのことをよろしくお伝え下さい。お頼みします。用事のみ
ついでのときに
早々　かしこ
六月二十八日　慶喜
筆子殿へ

巣鴨の慶喜邸のすぐ近くに山手線（全線開通は明治三十六年四月）が通ることになりその騒音を嫌った慶喜は、引っ越し先を探していました。この引っ越し先探しには蜂須賀家の茂韶・正韶も尽力をしたようで、そのことに対する礼状です。

この手紙では来月中（七月中）に受け取れるとなっていますが、実際に引っ越しをしたのはその年の暮れも押し詰まった明治三十四年十二月二十四日でした。

（ハチス三一三）

蜂須賀正韶・筆子夫妻と姉妹たち
（徳川博物館蔵）

【年代不祥　慶喜から筆子あて】

披見いたし参らせ候
とかくうつ〻〻しき
天気ニ候
まつ〻〻御障りなく
悦入候然者盗難
の事御聞及のよし
右ハ当月一日頃より
五日迄の間ニて土蔵
の窓をやぶりはいり
大小刀其外衣類こづか
目貫之類数品被盗候
しかし賊ハもはや捕縛
になり品物も大概
出候由ニ候其後ハ別条
無之御安心可被成候
観徳会御もようし
の由嘸御にぎやかと
そんし候
御返事迄あら〻〻
めて度
可祝
五月
十六日　慶喜
筆子殿
御返事

手紙拝見いたしました。
とかくうっとうしい
天気ですね。
まずまずお障りなく
喜んでおります。さて、盗難の
ことお聞き及びとのこと
これは、当月一日頃より
五日までの間に土蔵の
窓をやぶって入り
大小刀そのほか衣類こづか
目貫などの数品を盗まれました。
しかし賊はもはや捕まり
品物もおおよそ
出てきました。その後は別に変わり
ありませんのでご安心ください。
観徳会（弓の会）を催された
とのことにぎやかでした
でしょう。
ご返事まで　あらあら
めでたく
かしこ
五月
十六日　慶喜
筆子殿
お返事

筆子に対して慶喜邸盗難の件の内容を知らせる手紙です。五月一日から五日の間に土蔵の窓を破って忍び込み刀・衣類・こづか・めぬきなどのものを盗みとられたのですが、盗人も捕まり、盗品もほとんど帰ってきたので心配をしないように伝えています。

東京巣鴨の慶喜邸では、請願巡査（費用を駐在要請人（ここでは慶喜）が一切負担した警視庁からの派遣巡査）を置いていたようです。盗難などへの警戒を強めていたのではないでしょうか。また、この文書に「観徳会」という会のことが出ていますが、正韶あての別の手紙に「観徳会中り付（あたりつけ）お回し下され」という文章があり、蜂須賀家主催の弓の会であったことがわかります。

（ハチス三一〇）

【明治三十二年または三十三年　慶喜から筆子あて】

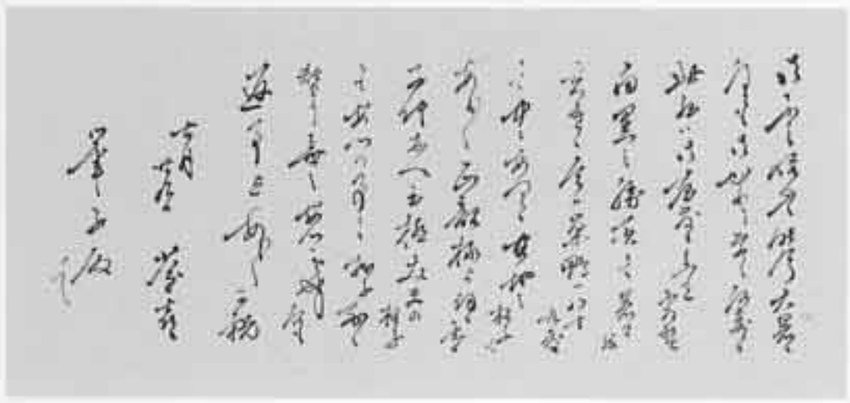
御ふミ悦入候昨今大暑候
得とも御かわりなく何寄ニ候
此程ハ御屋敷へ参上
　　不相替
白黒之勝負ニて暑さを
忘れ候今日巣鴨ハ八十九度
ニて中々あつく候其地之
　　様子も
あら々々正韶様ヨリ伺候処
子供両人至極丈夫の様子
ニて安心の事ニ候拙子別ニ
替り無之安心可被成候何も
返事迄あら々々可祝
七月
廿九日　　慶喜

筆子殿
まいる

お手紙喜んでおります。昨今は大暑ですが変わりなくなによりに思います。この前お屋敷（蜂須賀邸）に伺い相変らず白黒の勝負（囲碁）にて暑さを忘れました。今日巣鴨（現豊島区巣鴨）では華氏八十九度（約摂氏三十二度）で随分暑く。そちらの様子もおおよそ正韶様より伺っておりますが、子供ふたり（年子・笛子）ともとても丈夫とのこと安心しています。私は別に変わりありません。安心してください。いずれも返事まで。あらあらかしこ。

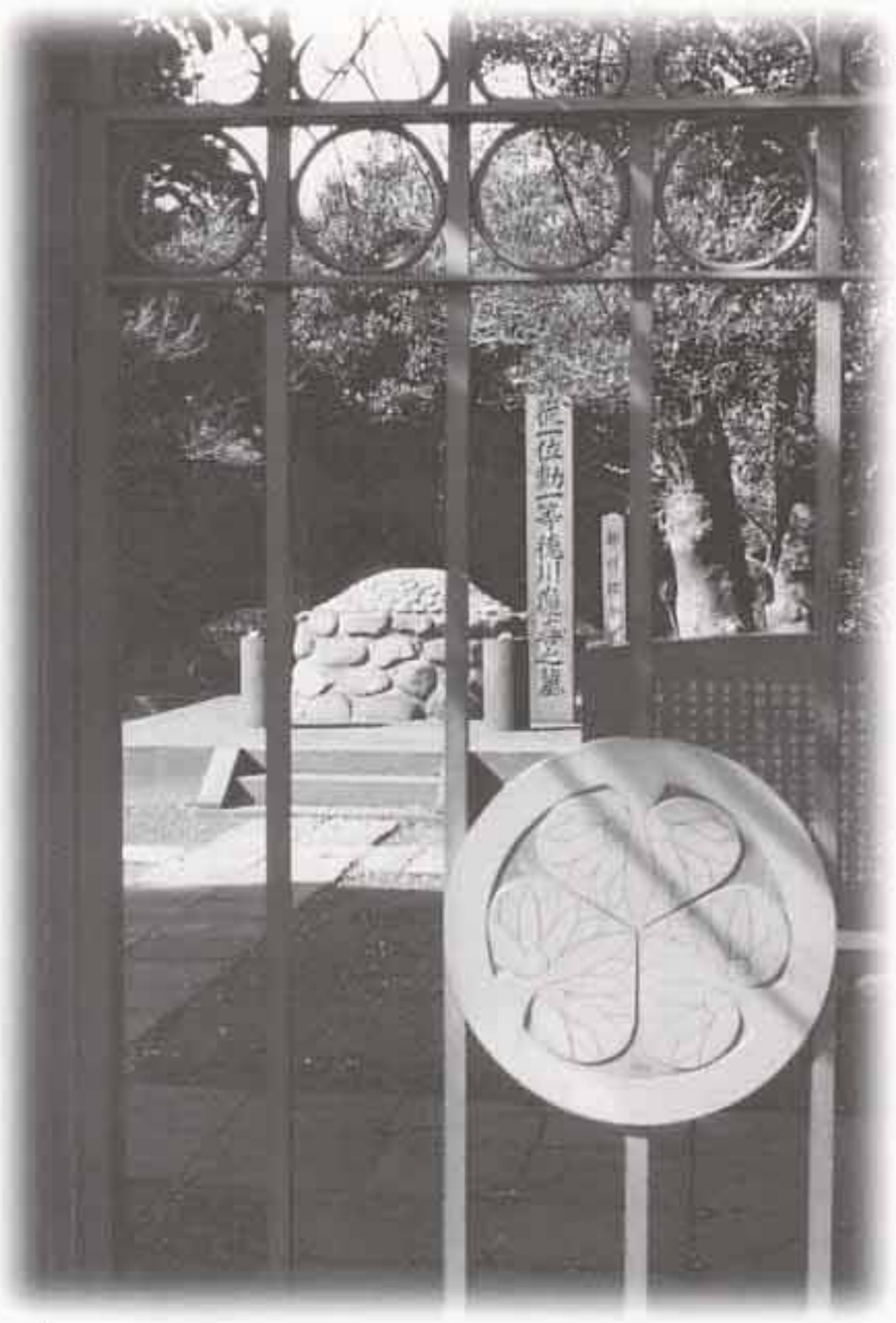
七月二十九日　　慶喜

筆子殿
まいる



この手紙は子供両人と記されており、年子・笛子が生まれた後、小枝子が生まれる前と考えられるので、明治三十二年もしくは明治三十三年のものと推定されます。
真夏の暑い中の茂韶との囲碁を「白黒の勝負」と表現しているところがおもしろい。

（ハチス三一五）



慶喜の墓

【明治三十二年　慶喜から筆子あて】

其地ハ如何候当地ハ昨今
よほど春めき緩かに成候
昨日は滞なく御立被成候
由其地ハ定めてよほど緩気
にて梅抔もさかりと存候四日
夕刻ヨリ鴈打ニ松戸へ参候処
あまり都合よろしからす
　　やうゝゝ
鴈壱羽獲候得共何分ニも
鳥少く鴈も拙子のうち候ニハ
無之候此程正韶様へ肉
ペプトンの事御はなし申置候
先日ヨリ朝夕用ひ試ミ候処
至極よろしく御まへニハ極適当と
存候処右品ニ和製有之
夫はにをひよろしからずにがくして
味甚あしく依而泊来品
少々ニハ候得共御目ニかけ申候間
御試ミ被成候様ニと存候其後
の様子承り度あら々々申入候
正韶様へ宜敷御頼
何も用事のミめて度か
　　しく

三月
七日　　慶喜

筆子殿
まいる

尚々肉ペプトン用ひ方ハ
此程正韶様へ委敷
御はなし置申候以上

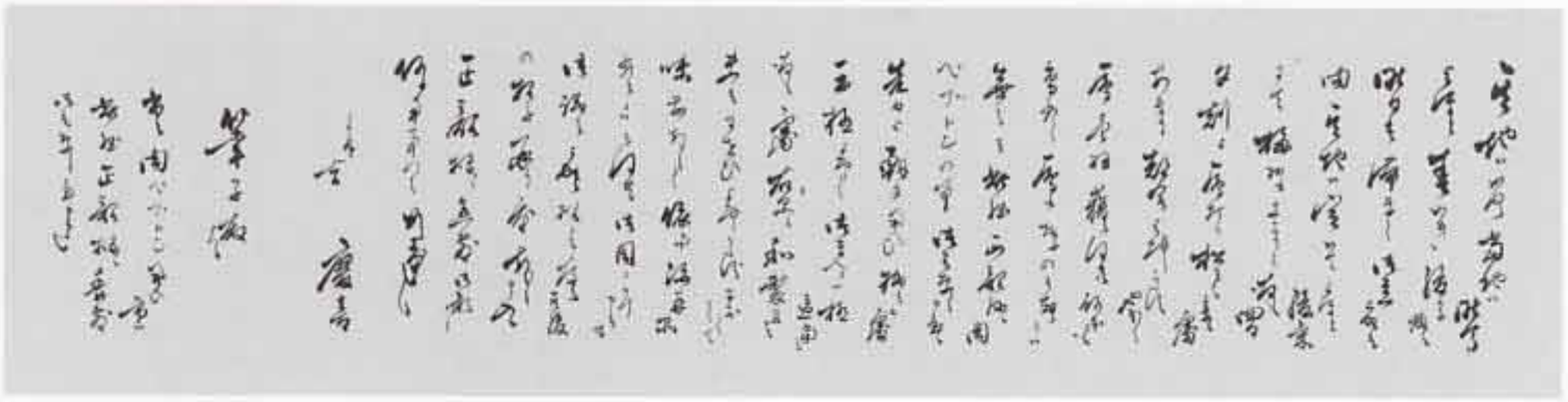
「ペプトン」は、タンパク質を分解してできる水溶性の物質をいいますが、「肉ペプトン」は、肉のタンパク質を分解したものを言うのでしょうか。いずれにせよ、滋養強壮薬として用いていたことは間違いないようです。きちんと朝夕試飲してから薦めるところさらに「和製これあり、それは匂いよろしからず、苦くして味悪しく」と書いているところは、慶喜自身が国産品を試してみていることを示し、運動をはじめとして人一倍健康に気を使った慶喜らしくておもしろい。
この書簡は、「家扶日記」によれば、明治三十二年四月の項に出てきており、湯河原へ湯治中の筆子に、舶来の「肉ペプトン」とともに送ったことが記されています。

そちらはいかがですか、こちらは昨今
よほど春めき緩やかになりました。
昨日は、滞りなく立たれたとのこと
そちらは随分寒気もゆるんで
梅なども盛りでしょう。四日夕方
より雁を打ちに松戸へ参りましたが
あまり結果は良くなく
　　やっと
雁一羽を獲えました。何分にも
鳥少なく雁も私の打ったものでは
ありません。今度正韶（蜂須賀）様へ
肉ペプトンの話をしました。
先日より朝夕に試したところ
とてもよろしく、あなたにはよいだろ
と思っていたところ、この品には国産
のものがありますが、匂い悪く苦くて
味がとても悪いので舶来のものを
少しではありますがお送りしました
ので、試みていただければと思います。
その後の様子も伺えればと思います。
あらあら申しました。正韶様にもよろ
たのみます。用事のみ。めでたく
　　かしこ。

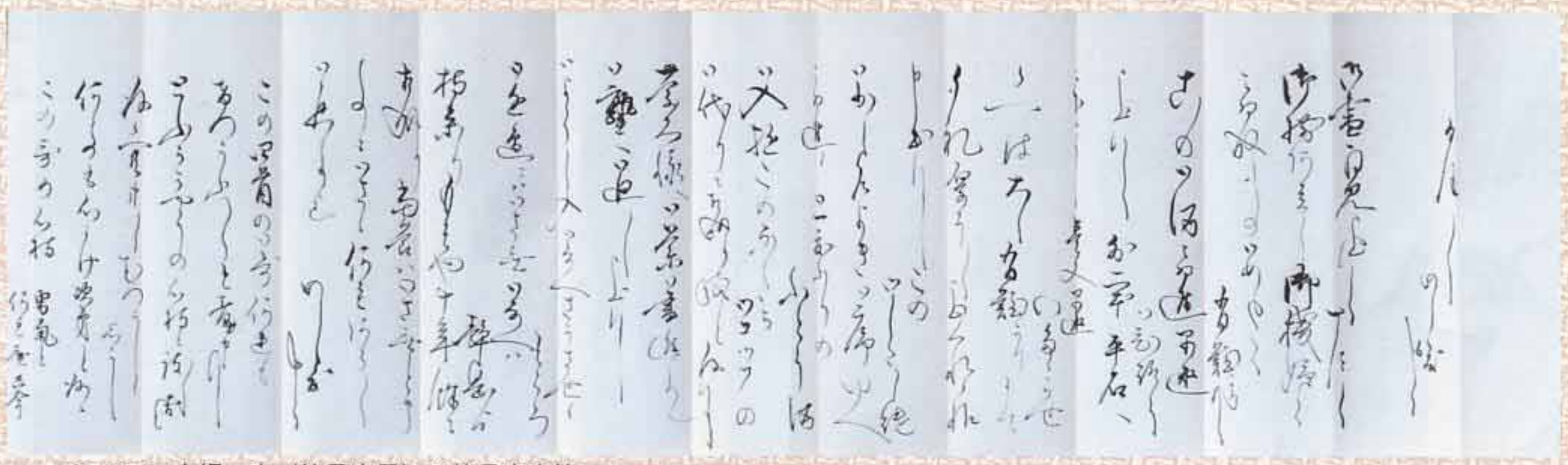
三月
七日　　慶喜

筆子殿
まいる

なお、肉ペプトンの用法は、
この度正韶様へくわしく
話してあります。　以上



（ハチス三〇一）

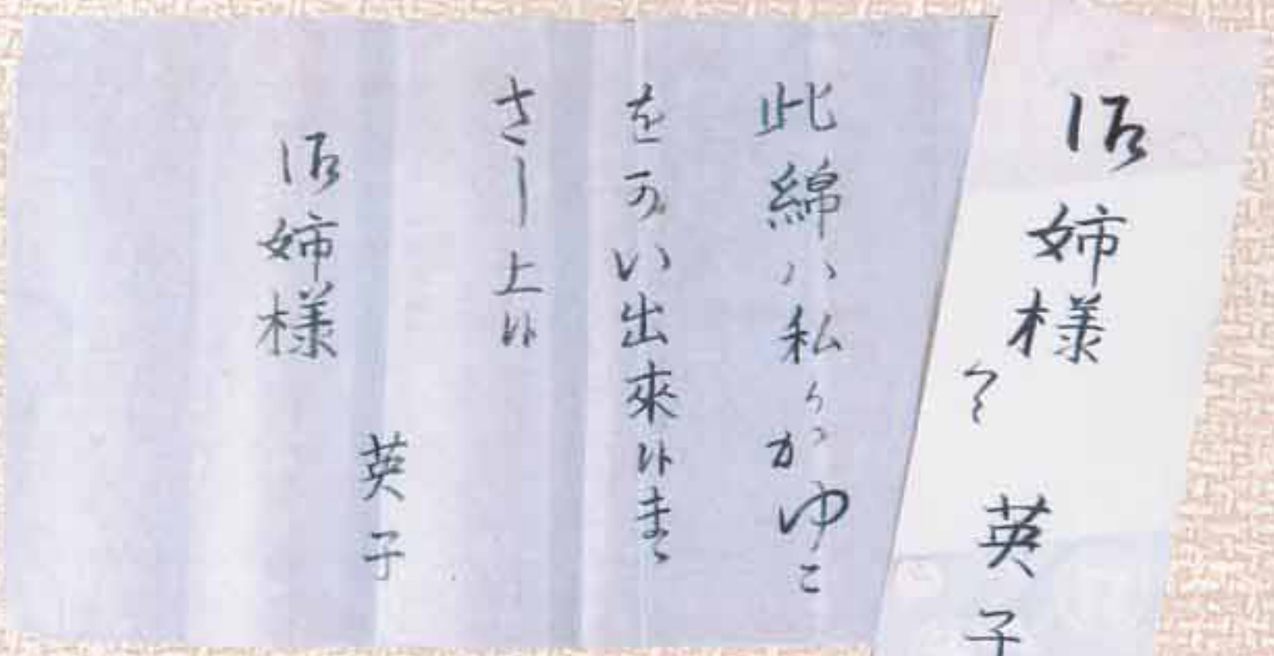


ハチス557　中根　幸（筆子実母）の筆子宛書簡

徳川慶喜とその親族（徳川博物館蔵）

親族から筆子への手紙

筆子に寄せられた親族からの手紙は、慶喜からだけではない。兄である厚（分家して男爵）姉である鉄子（一橋徳川達道夫人）を初め多くの兄弟姉妹、徳川宗家で慶喜を嗣いだ家達、水戸徳川家の昭武からも寄せられている。兄弟姉妹は仲が良かったようで、家族の写真も多く残されている。また、慶喜の側室で筆子の実母であった中根幸からの手紙も残されている。華族制度の中で実母でありながら側室という微妙な立場で娘に書かれた手紙は興味深い。

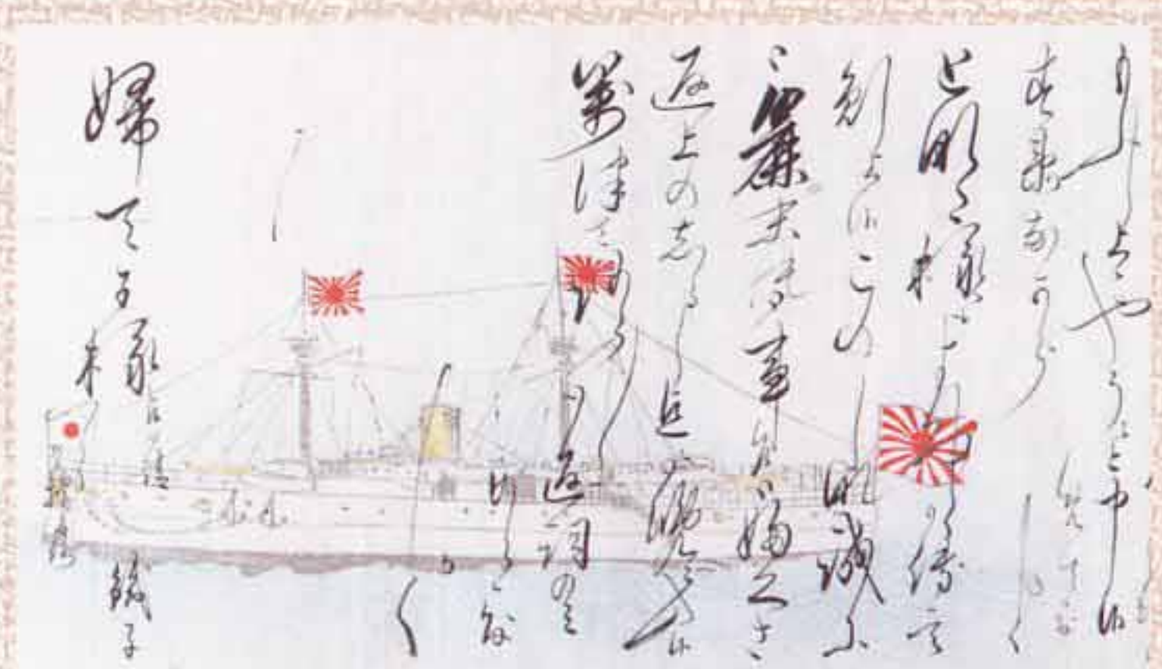


ハチス619　徳川英子の筆子宛書簡

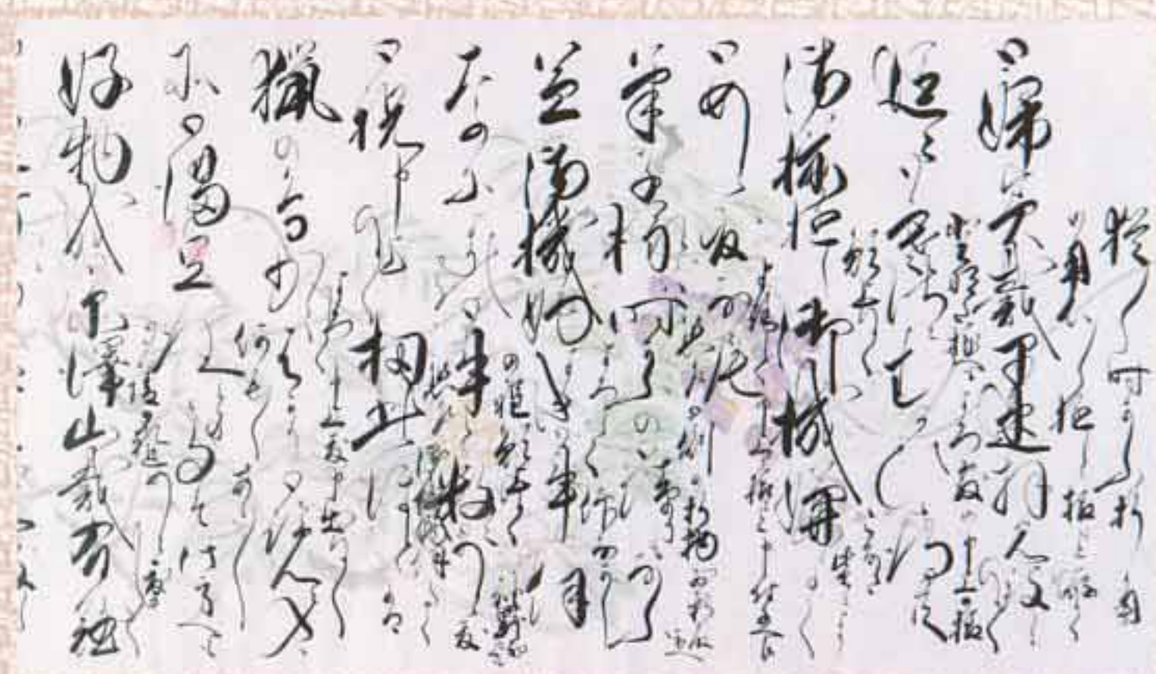
御姉様

此綿ハ私かかゆこ
をかい出来候まゝ
さし上候　英子

英子は慶喜の十一女で筆子とは十一歳違いの一番下の妹である。これは四、五歳の頃のものだろうか、自分で飼育した蚕でできた綿を姉に贈った時に添えた手紙で、かわいらしい字で書かれている。



ハチス573



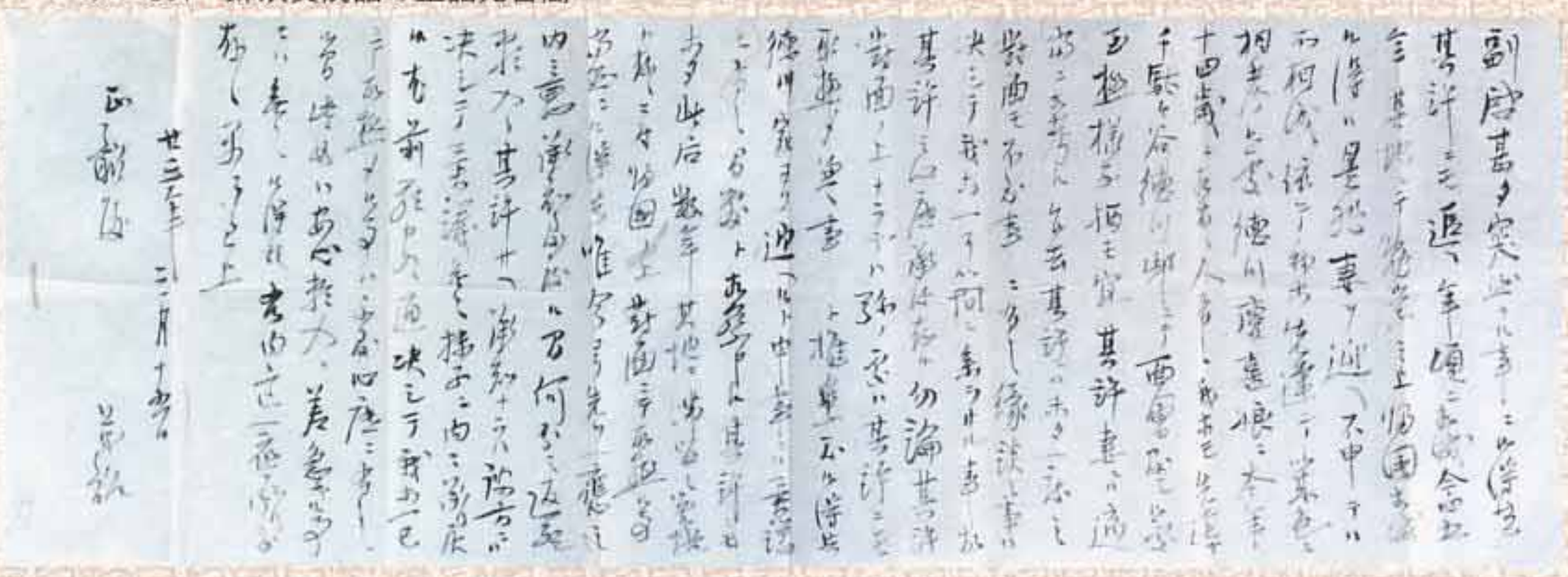
ハチス574

一橋徳川鉄子（慶喜三女・筆子の姉）の筆子宛書簡

蜂須賀正韶と徳川筆子

蜂須賀正韶は十六歳で、明治二十年六月三日父茂韶と同じ英国ロンドンへ留学をし、ケンブリッジ大学に学ぶことになる（父茂韶はオックスフォード大学）。この正韶の元に、父茂韶が結婚話を持ち込んだのは正韶十九歳、明治二十三年三月のことだった。相手は、最後の徳川幕府将軍慶喜の四女筆子まだ十四歳であった。

この後、ふたりは英国と日本遠く離れながら婚約者となり、手紙のやりとりを続けた。ようやく正韶がロンドンの留学を終え帰国したのは、明治二十八年の十二月であったが、結婚の準備も手紙でおこない、同じ月の二十四日に実際にはほとんど言葉をかわすいとまもなく結婚式を挙げたのである。

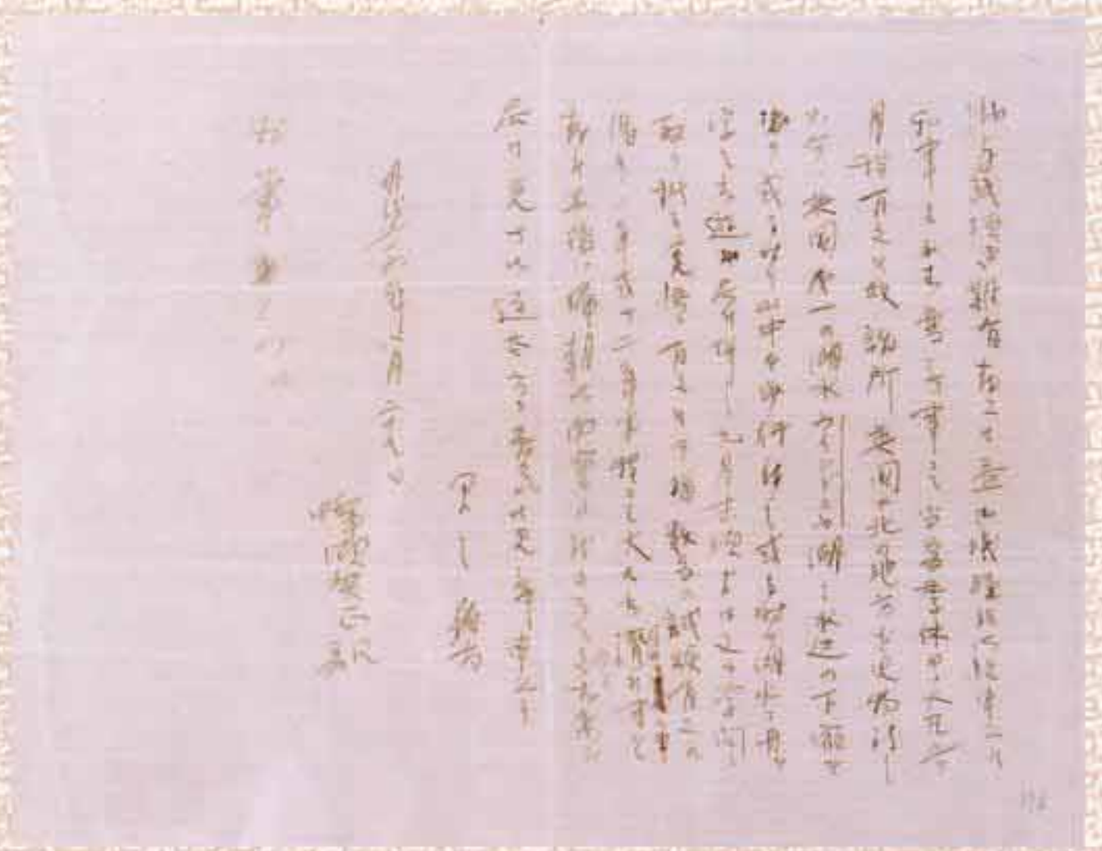


ハチス361　蜂須賀茂韶の正韶宛書簡

副啓甚タ突然ナル事ニ候得共
其許ニモ追々年頃ニ相成今四五
年其地ニテ勉学之上帰国相成
候得ハ是非妻ヲ迎ヘ不申テハ
不相成依テ我等先達テ以来色々
相考候処徳川慶喜娘ニ本年
十四歳ニ相成候人有之我等モ先達テ
千駄ヶ谷徳川邸ニテ面会致シ候処
至極様子柄モ宜其許妻ニハ適
当ニ相考候乍去其許ニハ未タ一度之
対面モ不致事ニ有之縁談之事ハ
決シテ我等一了簡ニ参ラサル事故
其許之心底承度存候勿論其許
対面ノ上ナラデハ弥ノ処ハ其許ニモ
取極メ兼候事ト推察至候得共
徳川家ヨリ迎ヘルト申事ニハ異議
モ有之間敷ト相察申候其許ニモ
未タ此后数年其地ニ滞留之覚悟
ト存候ニ付帰国ノ上対面ニテ取極候事
当然ニ候得共唯今ヨリ先ツ一応之
内意承知致度候間何分之返答
頼入候其許サヘ承知ナラハ彼方ニハ
決シテ異議無之様子ニ内々承り居
候尤前顕申入候通決シテ我等一己
ニテ取極メ候事ハ不致心底ニ有之
候間此段ハ安心頼入候差急キ候事
ニハ無之候得共右内意一応承り度
存候早々已上

廿三年三月十五日　茂韶

正韶殿



ハチス478　正韶の筆子宛書簡

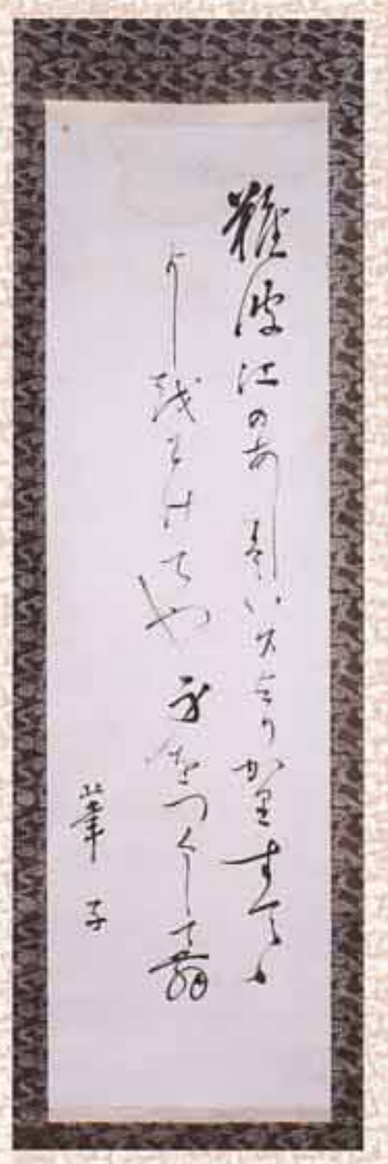
御手紙頂き難有存上候益御機嫌能御悦申上候
私事も不相変無事ニて当夏季休日ハ大凡三ヶ
月程有之候故諸所英国の北の地方を見物致し
只今ハ英国第一の湖水ウインドシヤ湖之水辺の下宿を
借り或る時は山中を歩行致し或る時は湖水ニ舟を
浮へ相遊居候併し九月末頃ヨリは又々学問ニ
取り掛る覚悟ニ有之候今猶数度の試験有之候
得共二年或は二年半程ニて大凡相済ませ可申候事と
存候其後ハ帰朝御面会も致さるべく今ヨリ相楽み
居候先は御返答方々暑気御見舞申上候
早々頓首

明治二十六年八月二十九日

お筆との江

蜂須賀正韶

ハチス525　筆子の正韶宛書簡



和歌書軸　筆／筆子

明治23年７月６日
徳川慶喜四女筆子（蜂須賀正韶夫人）

展示資料目録

資料目録	宛　　名	作成年代	備考（資料番号）
【書簡】			
徳川慶喜書簡	徳川筆子	明治期	ハチス284
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治28年	ハチス291
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治31年	ハチス292
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治31年	ハチス293
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治31年	ハチス295
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス298
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治32年	ハチス301
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス310
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治30年	ハチス311
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治34年	ハチス313
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス314
徳川慶喜書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス315
徳川慶喜書簡	蜂須賀正韶	明治31年	ハチス323
徳川慶喜書簡	蜂須賀正韶	明治31年	ハチス330
蜂須賀正韶書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス488
蜂須賀正韶書簡	徳川筆子	明治26年	ハチス478
蜂須賀正韶書簡	徳川筆子	明治28年	ハチス482
徳川筆子書簡	蜂須賀正韶	明治28年	ハチス549
徳川筆子書簡	蜂須賀正韶	明治28年	ハチス525
蜂須賀茂韶書簡	蜂須賀正韶	明治23年	ハチス362
蜂須賀茂韶書簡	蜂須賀正韶	明治23年	ハチス373
蜂須賀随子書簡	蜂須賀正韶	明治期	ハチス416
蜂須賀随子書簡	蜂須賀正韶	明治28年	ハチス431
中根幸書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス557
徳川厚書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス598
池田仲博書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス608
徳川久書簡	徳川筆子	明治28年	ハチス616
一橋徳川鉄子書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス573
経子（伏見宮妃）書簡	蜂須賀筆子	明治35年	ハチス578
大河内国子書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス582
徳川英子書簡	徳川筆子	明治期	ハチス619
松平浪子書簡	蜂須賀筆子	明治期	ハチス583
【書軸】			
蜂須賀筆子　和歌書軸		明治期	ハチス1008
【図面】			
三田屋敷図面		明治期	ハチス　97
【写真】			
徳川慶喜肖像写真		幕末以降	茨城県立歴史館蔵
徳川慶喜家族写真		明治期	(財)水府明徳会徳川博物館蔵
家扶日記		明治期	松戸市戸定歴史館蔵

※期間中、展示品を入れ替えることがあります。

第十六回 企画展
徳川慶喜（よしのぶ）と蜂須賀（はちすか）家
―慶喜・娘への手紙―
平成十年四月二十八日 発行
編集・発行 徳島県立文書館
〒七七〇―八〇七 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八六(六六八)三七〇〇
印刷 原田印刷出版株式会社
〒七七〇―八九三 徳島市西大工町四ノ五
電話 〇八八六(二二)三三五六